

越後路の篆刻家・山田寒山〔七〕

岡村 浩

序

これまで標題について六篇にわたり、資料紹介と内容分析とを行ってきた①。六篇目をまとめて以来、月日を大きく開けてしまったのだが、平成十六年九月に山田寒山展を企画するなど最近、寒山に関して研究対象の主眼に据えることがあった。起稿頭初掲出した目次、描いた構想に沿って全てを詳細に言及し得ない面が生じるが、本篇において一応寒山研究を終結させるべく、論述する次第である。蒐集した資料には特殊かつ零細なものが多くあり、備忘録としてもなるべく掲示しておきたい。

15 佐藤六石

新発田駅（新潟県新発田市）に隣接する東公園に足を踏み込むと、二つの石碑がそびえ建っていることに気付く。一つは「大倉翁墓銘」。新発田出身の実業家大倉喜八郎が祖父定七の顕彰のために大正五年（一九一六）建碑したもので、頼山陽撰文、筆者は当代きつての書家日下部鳴鶴である。その書は楷書に真骨頂ありとの評価を得ているが、この碑は隸書体を用いられている。その書風は中国漢代の石碑西狹頌や張遷碑を学び、別に独自の機軸をうち出した観がある。

更に奥へ入り大倉翁寿像を通り過ぎたところに、ひときわ背の高い石碑があり、これが「佐藤六石君碑」である。昭和五年（一九三〇）六月、台

北帝国大学教授久保得二撰文、阪正臣書。阪氏は安政二年（一八五五）名古屋生。幼名政之介、字は從叟・茅田小民。木隠弟鬼・観石・桃坪等の号がある。華族女学校教授、宮内省御歌所寄人主事を務めた。宮廷歌人としてその名は大いに喧伝され、女学校の習字教科書にも多く筆を揮った。古筆研究会「難波津会」創立にも参画し、門弟の育成に当たった。昭和六年（一九三一）没後、正四位に叙される。歌人であるから仮名書き作品はよく見るが、石碑は楷書体で珍しい。因に県内では分水町にやはり楷書による石碑があることが確認される。

大倉・佐藤両氏共に新発田の産ながら、その偉業は中央で築きあげられたものであるためか、地元市民にとっては馴染みが薄い。大倉氏については現在東京赤坂に「大倉集古館」（大正六年開設）があり、喜八郎の購求した東洋芸術を中心とするコレクションが一般に公開されている。その名は大正・昭和を通じ政財界の大物として知られているが、他方佐藤氏に関しては今では殆ど顧みられないのが実状である。

佐藤六石翁についての資料は管見では僅少であるが主なものに、

○「紹介六石・佐藤寛先生」（高橋礼弥著・『新発田郷土誌』七号所収）

○「大倉翁碑と佐藤六石碑」（斎藤正夫著・『新発田郷土誌』十九号所収）

○『北越詩話』（坂口五峰著）

○「近世名流能書家伝（七）」（須羽源一著・『書論』十八号所収）

がある。事績に関しては石文が最もよく伝えていられると思われる。まずはこの小論も、石文にしたがって略伝を記したい。

佐藤氏、名は寛、字は公綽、六石と号した。新発田に元治元年（一八六四）生まれ、幼少より聖籠村の大野耻堂の私塾絆己楼に学ぶ。明治十五年十八歳の時、新潟日日新聞の主筆となり紙上に健筆を揮ったが、政治的忌諱にふれ下獄数回に及ぶ（石文ではこの事件につき「觸忌諱下獄数回」とのみ記している）。後、東京に行き皇典講究所に入って古事類苑について修め、ついで慶應義塾・国学院大学の教授を務めた。また、伊藤博文の知遇をうけ、その幕下として朝鮮統監、親王宮侍講、修学院教師等を兼職し

た。帰国後、大和新聞社に入った。一方、若年より漢詩を嗜み、本格的には森槐南・国分青厓・本田種竹等と詩社「星社」を結社し、大正六年には随鷗吟社を設立し、土居香国の後をうけ「随鷗集」の発行を手がけた。交友頗るひろく諸道に関心を寄せ、南画家の小室翠雲と崇文院を創立し、先賢の遺墨を刊行することを目ざした。業中ばにして昭和二年四月二十二日（一九二七）、享年六十四で逝去。多摩墓地に葬られる。初め大浜氏の女を娶り男子徹雄をもうける。次いで伊沢氏を継室とするが子はなかった。主な著書として、『日本文章論』『和文軌範』『麴亭詩話』等が挙げられる。

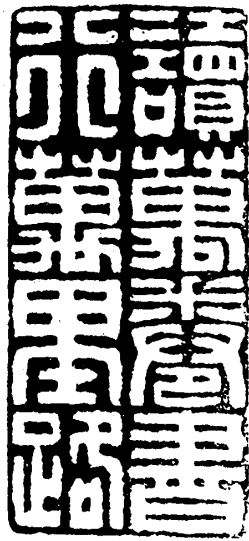
『北越詩話』には、同時代を生きた漢詩人坂口五峰のとらえた六石評が記されている。五峰自身、名うての漢詩通であり、前述の文と重複する点もあると思われるがその言を引いてみたい。『北越詩話』（巻十）小林廣徳の条に、「……憶ふに耻堂先生門下二千人。一時才名を得しもの多きも。或は秀でて實らず。或は中道に廃業し。未だ文学を以て樹立せしものあらず。止だ教室（廣徳の号）、苦学力行。終身倦まず。遂に能く一家を成せり。詩は餘技と雖も。今日同門中。與に比肩す可きものは。獨り佐藤六石あるのみ。六石名は寛字は公綽。一号磊磊道人。又た青邱樵者。教室と同藩。曾て槐南先生に学び。野口寧齋・大久保湘南・宮崎晴瀾と森門四傑の称あり。今ま湘南の後を承けて随鷗集を刊し。岩溪裳川・土居香國等と雄を争ふ。……」とあり、大野耻堂・森氏門下の逸材であることが強調されている。

六石翁の蒐集した書物凡そ二千五百冊、及び遺愛の文房具や自用印が遺族佐藤齊子女史の特別な計らいにより、新発田市立図書館内に寄贈され現在同館で管理されている。私の守備範囲である書道関係領域の図書の一部を過眼したが、日本では余り馴染みのない中国石刻の拓本や、集帖等唐本仕立ての珍本がうず高く積まれており、この点のみからも稀有のコレクションであるのは間違いない。石文によれば一時六石自ら朝鮮に渡っているのだから、大陸にてその際に入手したものが多分に含まれているのだろう。個人刊行の漢詩文集なども、当時は発行部数が少なく、この類の本は配られた範囲も限られていたと思われ、今では得難き資料といえる。

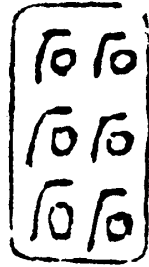
中でも特筆すべきは、印箱二つにぎっしりと収められていた印章である。雅印は愛蔵図書に押す蔵書印、詩書画制作の暁に落款として押すものなど、文人にとり必要不可欠の文房具なのである。当時の図書館長遠藤利信氏・佐久間惇一氏のご配慮を賜り、これら六石の自用印（自らが使用した印）百余顆を一括接見する機を得た。漢籍類のコレクションもさることながら、これ程までに夥しい数の雅印を座右に備えた文士は珍しい。次に注目すべき雅印について所見を述べ、六石蔵印の一端を紹介したい。

- ①蔵書印「讀萬卷書、行萬里路」。木印・白文。側款「醉石作」。一刻者は木内醉石。名は愚、初名は重遠、房之助と称す。もと幕府の小吏。静岡より江戸川畔に移り、印人中井敬所と交る。仙居にいる如き生活をし、秋雨草廬と号した。昭和二年（一九二七）一月二十三日病没。享年七十五。
- ②蔵書印「萬卷堂記」。石印・朱文・獅子鈕。側款「荃廬爲六石先生作」。刻者は河井荃廬。名は仙郎、字は長生。京都刻字舖の子で、印技は篠出芥津より学ぶ。清国に遊び彼の大家吳昌碩に学ぶ。帰国後東京に住み、三井聴冰閣等当時一流の人物と交った。金石学・文字学・書画鑑識に精しく、收藏に富んだ。昭和二十年（一九四五）三月十日の空襲時、満室の書画蔵書と運命を共にした。享年七十五。『荃廬印譜』等がある。
- ③落款印「寛印」「六石」。ゲタ印・木製・白文・朱文。側款「六石先生正篆、乙卯二月郊處山人作」。一刻印者郊處は未詳。乙卯とは一九一五年、六石五十一歳の時に当たる。
- ④落款印「寛字公綽」。石文・白文・獅子鈕。側款「六石先生翠石作」。刻者は高畑翠石。名は持隆。明治十二年（一八七九）東京生、昭和三十年（一九五七）没。享年七十九。中央で名を馳せた印人である。
- ⑤蔵書印「六石山人再讀」。石印・朱文・獅子鈕。側款「乙卯桂秋敬齋刻」。刻者は山内敬齋。名は退思、字は孝卿、別号愛日居・振々道人。甲府の人。高畑翠石、河井荃廬に師事。昭和七年（一九三二）六月十二日没、年四十五。

⑥蔵書印「六石讀過」。石印・朱文・鳥鈕。側款「乙卯七月孝卿製」。一刻者は山内敬齋。孝卿とはその字。



①



⑬



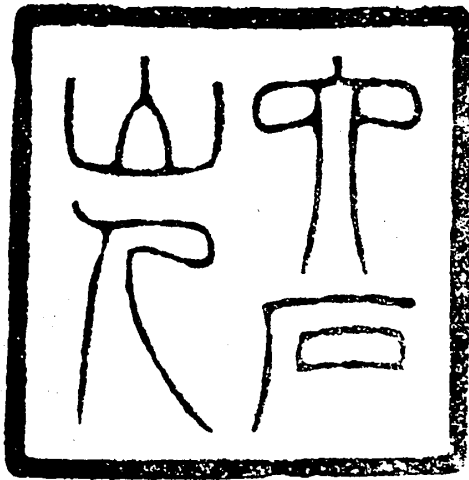
⑬



②



⑬



⑮

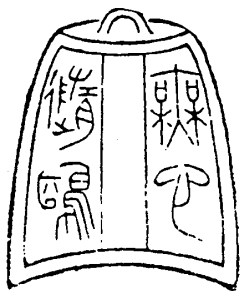


⑮

図一 佐藤六石自用印（原寸）



⑧ 廉卿監藏



刻者不明



刻者不明



刻者不明



⑩



⑨



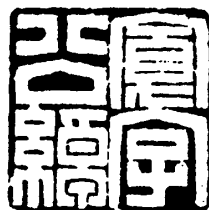
⑭



⑨ 廉卿鑑藏



⑦



④



⑥



⑫

⑧⑨は寒山刻・高橋義彦自用印

図一 (その二)

⑦落款印「佐藤寛印」「六石山人」。両面刻・木印・白文・朱文。側款「乙卯初夏山孝卿篆」「樓遲見詩経、敬齋刻於愛日居」。―刻者は山内敬齋。愛日居はその室号。

⑧「賜天覽」。石文・朱文。側款「丁巳抄秋山孝卿作」。―刻者は山内敬齋。丁巳は一九一七年、六石五十三歳の時である。

⑨収蔵印「六石山人精賞」。石印・朱文・魚鈕。側款「敬齋」。―刻者は山内敬齋。

⑩落款印「済美」。木印・白文。側款「敬齋刻」。―刻者山内敬齋。尚、鈕（印のつまみ部分）には篆書で「寸志不忘」と巧緻な細工彫りがされている。

⑪「随鷗吟社」。石印・白文・獅子鈕。側款「敬齋篆」。―刻者山内敬齋。

⑫「随鷗」。石印・白文・獅子鈕。側款「敬齋刻」。―刻者山内敬齋。

⑬落款印「六石」「磊磊」「佐藤寛印」。銅印三方一組・木箱入・朱文・朱文・白文。箱のふたに「庚戌春日製、於日本寒山寺、寒山」と墨書あり。刻者は山田寒山。名は潤。尾張長久手村生。清国に遊び張継の詩で名高い寒山寺に鐘を寄進し、帰国後これに因んで日本寒山寺山田寒山と名のつた。篆刻家であると共に書画を好み、特に墨竹を得意とした。越後を数次訪れ、新潟市古町通四番町の印判屋木村竹香の次男正平を養子にするなど本県と縁の深い人である。大正七年（一九一八）十二月没。享年六十三。尚、庚戌は明治四十三年（一九一〇）、六石六十四歳時の刻印。

⑭住所印「東京外千駄谷五三八、佐藤寛」。石印・朱文方格印。側款「呈六石先生、蕉陰作」。―刻者蕉陰については未詳。

⑮落款印「佐藤寛印」「六石山人」。両面刻木印・白文・朱文。側款「醉石山農篆」。刻者木内醉石については①参照。

図版には刻者の明らかなるものを中心に掲出したが、全体を落款印・収蔵印・遊印（座右の銘等佳句を刻んだもの）・室号印に大別してみても、まず落款印では「六石」「磊磊」が多く、「佐藤寛」「寛字公綽」、藤原姓を用いた「藤原公綽」もある。

収蔵印・蔵書印の語句をみると、翁の読書人たる一面が大いに偲ばれる。「讀萬卷書、行千里路（萬卷の書を読み、千里の路を行く）」の語は、明

の文人董其昌がその著『画禅室隨筆』で用いて以来、文士に愛されているものである。単に「佐藤寛蔵書印」「磊磊山人所蔵書記」というのみならず、「六石山人萬卷堂」「萬卷堂記」と類稀なる蔵書量を誇ったものがある。遊印には「友古人（古人を友とす）」「半窓明月」「守真」「麗華雨」「志在千秋（志は千秋に在り）」「清風明月」「我善隣估（我善く隣估す）」「性情物外」等、心静かな雅致のある語句が用いられ、人柄を彷彿とさせるものといえよう。

また、詩社を結社してから使用したものとして「随鷗吟（吟）社」「無心随鷗」等がある。室号では「翹亭」「六石山房」が散見される。

他に翁自ら用いた印ではないと思われるものに、「佐藤六石先生建碑会」「大院君章」がある。前者は顕彰碑を建てる際実行委員会が用いたのだろう。因に碑陰には、建碑に尽力した者十一人の名が列記されている。後者の「大院君」とは朝鮮李朝期の李熙王の父で、革命派の雄。名は晁應、大院君はその号。彼の地で六石が交ったのか興味深い問題である。

刻者に関しては、側款から判る限りでは山田寒山・河井荃廬・山内敬齋・高畑翠石等中央で活躍した大物が看取される。文榎・蕉陰・郊處については今後明らかにしてゆきたい。綜覧すると、寒山の銅印が洒脱・飄仙味が通っており、誠に佳刻である。寒山は伊藤博文にかわいがられた人で、一方六石翁もまた博文の幕下に加わっており、博文公を通じて両者知己になったとも推察できる。荃廬は印を求められても容易に応じなかつたと伝えられる印人で、蔵印中注目すべき一点である。わが国近代印壇史中、學術・技術両面において特に傑出した人物として位置付けられよう。

冒頭に紹介した石碑の文章に移すと、「方今人人競習洋語、我邦言文日趨頹靡無乃傾圮國礎乎、遂草國語新論以警當世……」とある。六石翁の壮年期には既に世の風潮は競って外来語を学び始め、國語がすたれつつあった。当時ですらそのような有様であるから、現状は言うに及ばない。漢詩人古文研究者としての六石翁の業績は、時を経るに従って色褪せるのは仕方がないことであろうが、郷土が誇るべき全国的スケールで活躍した雅人

がいることと、翁の蔵した雅印中には、多彩な交友を窺わせる名手の刻によるものが少なくないことを記し留めたい。

16 富益齋

「富」は略称で本姓、富取。越後地藏堂（現分水町）きつての旧族である。この人物の印技・印学に関する著述を山田寒山が公刊し、『印章備正』という。

本書は一帙二冊（和綴）に成る。縦19×横13センチメートル。題簽は全て岡本椿所の篆書を用い、初世中村蘭台「印章備正」・杉聴雨「金石寿」の題字、永坂石球と徳富蘇峰、そして河井荃廬の序を載く。

蘇峰の序文に、「篆刻一道。雖小技。而精之。可進乎道。豈可輕哉。寒山尊者。與丁未印社諸彦相謀。校訂北越富益齋氏所著印章備正。……」といい、続く荃廬の文に、「富益齋者。余未詳事蹟。或云。学印于華亭道人。道人名激。平安沙門也。撰激古印要七卷。世罕有伝抄。益齋此書。較諸印要。體例全同。而文簡為異耳。……」という。荃廬程の人物ですら、この益齋のことを不詳とし、京の華亭道人・名を激という人に印を学び、道人の著録「激古印要」に近似した内容であることに触れている。尚この道人は、中江杜激のことである（註②）。

次に寒山の凡例中では、

一、著者ハ京都ニ住シ篆刻ヲ以テ業トセシコトアリ文化平安人物志其名ヲ載ス

一、原本伝写精ナラズ且脱誤頗多シ可成原本ヲ存スル勉メタリト雖ソノ解

シ難キ所ハ悉ク之ヲ改竄補訂セリ

と益齋に言及する。以上京都の人であること、原本が写本であったことを知る。

上記諸名家の文中には一切触れられていないものの、先述のように益齋は越人なのである。『北越名流遺芳』（今泉木舌著・大正七年目黒書店刊）の二集・P123に、殆ど前記の『印章備正』の序文を引用しつつ、一言「益齋は北越の人なりといふも、其事蹟を詳かにせず。或はいふ、新潟の人な

りと。」と記す。新潟の文苑に詳しい『舟江遺芳録』（風間正太郎著・大正三年桜井市作刊）のP49に、「益齋は、伝へ曰ふ、本地の人なりと、今行迹を詳にせず、篆刻を以て名声あり、……」とあつておそらく前書は、この記述によつて新潟の人である伝聞を録入したと思われる。

一方、『北越名流遺芳』と同じ頃に刊行された『北越詩話』（坂口五峰著・大正七年目黒書店刊）の巻三・P353には、富取行徳（地藏堂の大庄屋）の条に付して、「其の族人中には富益齋の如き者あり。……益齋名は鴻。初め医を業とす。後ち京都に寓し。篆刻を以て名あり。……」と記し、新潟ではなく地藏堂の人であることを明記している。なおこの五峰の文には「寒山之を憶み。北遊の日。諸郡の間に搜訪し。竟に其の地藏堂人なるを知り。為めに里人と謀り。追遠の奠を行へり。」、また「益齋、文政五年二月に歿す。釋諡清山院宗遊益齋居士。墓は邑の常昌寺に在りといふ。」と歿年と墓所とを明らかにしている。

右の文中気にかかるのは、寒山越後漫遊中に益齋の生まれをついにつきとめ、地藏堂人なるを知ったとある点で、『印章備正』の中にはこの出生地に関する記録が全くみられない。これを考えるに、『印章備正』刊行本の奥付が大正二年一月になつていことから、寒山が益齋を地藏堂人と理解したのはこれ以降の事実であろう。

新潟の人・木村竹香のために刻した「羅漢印譜」、嗣子とした正平が竹香の実子であること、これらに加えて丁未印社をあげて刊行した『印章備正』の原本著者が越人であることもまた、寒山と越後路とを結びつける大きな要素として指摘出来よう。

地元分水町では郷土史研究の流れの中で富取一族に照射した内容があり（註③）、また架蔵に「嘉永五 壬子歳三月下浣使岡田子徳寫之 楳屋主人蔵」と署名のある江戸末期の「印章備正」筆写本があつて、この本の書誌学的研究に資するものが存在することを付記しておく。

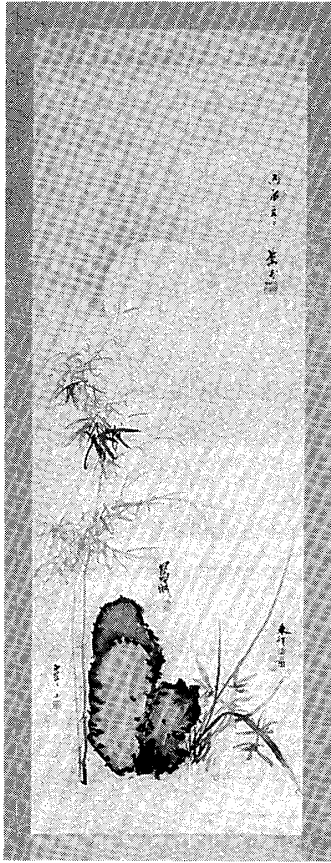
17 加茂周辺の寒山

地元では北越の小京都といわれる土地柄。青海神社が旧跡としてあるが寒山との関係でいえば定光寺に長期滞在した痕跡がある。同寺は曹洞宗。

18 柏崎・糸魚川その他

江戸中期以降、越後に中央の名流文人がこぞってやってきたことは度々記述する通りである。中でも刈羽郡柏崎町（現柏崎市）にはその殆どが草鞋をぬぎ、目の肥えた巨那衆が林立した証左である。本県きつてといってもよい趣味通の柏崎人が寒山のことを「山師」と呼んでいるのは興味深い。

図二は寒山の墨竹に他者三人が寄書合作した珍しい作。柏崎生の達磨画で名を残した山田東洋（一八六六～一九四六）が蘭を添えている。左の奇石は、新発田生の八百板菖城（一八七〇～一九四四）が描く。上方の満月を描いた「景甫」なる人物は不詳で、今後調査を要す。注視すべきは本作の景甫署名上部に、「丙辰夏日」と制作年を付しており、よって大正五年（一九一六）作であることが判る。残念なのはどこにおいての作か読み取



図二 四者合作

れない。しかしながら、東洋と菖城とが一緒に入っている点から越後路作であることは、ほぼ間違いない。

この山田東洋は柏崎の近世文壇を代表する文人の一人で、近年企画展が催され見直すべき機運は高まっている。その生涯は一ヶ所に留まらず、各地を放浪した。家号「山甚」の素封家の生まれながら、現世の利得に疎かった逸話が伝わるなど、偶々同姓以外にも寒山との共通点が見出せる。

糸魚川には良寛研究上知られる牧江氏があった。幕末の三筆・貫名松翁に師事した松山味間、下って良寛研究を全国に推進した相馬御風（一八八三～一九五〇）が出た。兩人とも相当な素封家で、出自のよい家系が優れた文士を輩出した当時の越後文芸史の図式の一端が偲ばれる。就中、上田良平なる旧族政治家のために山田寒山の養子・正平が刻した「上田良平」「蜂領」（共に朱文印）を押し印箋を過眼した。脇に「大正五年三月離節旬□製於寒山寺 正平」と正平の自署がある。この記述は重要で、即ち正平が遅くともこの大正五年までには上京して寒山寺に入っていたことが推し測られる。時に十八歳。正平の回顧録「會津先生と私」には、「ついに十六歳の初夏上京し、上野の停車場には翁（寒山）が迎へに出て居られ、上野の山下忍ぶ川のほとり寒山寺裏の者になつて」と記している（『書品』79号所収）。つまり印箋の款記によって、回顧録にみる年月の信憑性が確かめられるのである。

正平の若き頃の後援者には越後安田（現阿賀野市保田）の齋藤氏が知られるが、他、この糸魚川そして五泉、刈羽郡高柳町の村山氏など広い県内の各地にそれらが存在したのだった。だが元より十代の無名作家が旧家の外護を得るのは容易でなく、寒山が巡遊先で正平作の普及周旋に努め、そのあとおしよって遠方の良家に知己の客を得たと考える。

その他

冒頭紹介した筆者企画による山田寒山展に触れたい。水原町・安田町・京ヶ瀬村・笹神村四町村が平成十六年合併して、新たに「阿賀野市」が誕

生したことを記念しての文化事業で、平成十六年九月十一・十二日に旧笹神村役場隣ふれあい会館（現阿賀野市笹神支所）を会場とした。事業内容は県内より集めた寒山書画作約四十点、そして周辺の文人作も併せて展覧。記録集として『山田寒山集』を刊行、三人の講師による講演会を行い笹神在任の書家・石井清賢氏「風流寒山寺水原別院あり」、吉田東伍研究家・旗野博氏「東伍生家と鳴鶴」そして筆者「越後路の篆刻家、山田寒山の面白味」と題する三話に百七十人余りの聴衆が集まった。二日目には筆者による作品解説会を会場において開催した。初日夕刻には阿賀野市長・本田富雄氏をはじめ来賓をお招きして祝賀会も開かれた。

主催は旧四町村の有志に成る実行委員会を組織した。当地方では前例のない規模の古い書画の展示会で、当初開催が大いに危ぶまれたことも事実であった。しかし各委員の協力により重ねて実行委員会を開き、実現が叶った。鉄道の便が水原駅以降ない土地ゆえ參觀者の有無も気懸りだったが、二日の会期で四百人以上の方に足を運んで頂いたことは饒幸であった。何より東京都杉並区より寒山御子孫のご光来があった、講演会と祝賀会の行事に花を添えてくださったのが有難い（註④）。なお次に主な出品作目録を掲出しておく。

- 山田寒山作
- 村杉温泉ゆかりの詩書「泉延寿…」
- 同右書碑拓本
- 水墨良寛像
- 観解良家珍宝心月輪書軸

山田寒山展

阿賀野市誕生記念 五頭山麓ゆかりの文人

会期 平成16年9月11日(土)・12日(日)
10時から16時30分(12日は15時まで)

会場 新潟県阿賀野市山崎77
阿賀野市笹神支所 ふれあい会館

☎0250-62-4141 入場無料
〈県道・水原出湯線を「金屋」信号で左折し、旧笹神役場跡〉

主催 阿賀野市誕生記念・山田寒山展実行委員会
後援 阿賀野市・阿賀野市教育委員会・五頭郷土文化研究会・水原史学会・阿賀野市書道展実行委員会・阿賀野市水原文化協会・越佐文人研究会

趣旨 尾張長久手村生まれで東京で活躍した文人・山田寒山（一八五六～一九一八）は、伊藤博文等多くの著名人と交わり、「月落烏啼霜滿天……」（楓橋夜泊詩）のある中国蘇州寒山寺復興に尽力、自由な風狂人として近世文苑に名を留めます。新潟県にも何度かやってき

- 出雲崎町光照寺墨竹扁額
- 「一二三竿竹」墨竹扁額
- 「明月清風是故人」扇子
- 星見天海偈 寒山書軸
- 「君が代」自画讃
- 「一脈琅々」山水
- 「春畝贈烏金」二行書
- 「水天秋合」山水

寒山展葉書案内状

て、五頭温泉郷・村杉温泉には全国でも珍しい自筆詩碑が建っています。ハンコ作りを芸術として高め、會津八一等の印も刻しました。このように新潟県、とくに阿賀野市ゆかりの文人の顕彰を目的に展示を企画する次第です。

〈展 示〉

山田寒山の得意とした墨竹画と書（掛軸・額・扇面等）および篆刻資料を約50点。また、交流のあった會津八一・当地ゆかりの相馬御風・寒山の養子山田正平等の書画作約20点を併陳。

〈講演会〉

9月11日(土) 13時30分より館内にて

- 石井清賢氏（書家）
 - 旗野博氏（吉田東伍研究家）
 - 岡村浩氏（新潟大学助教授）
- による。
- 〈作品解説会〉 9月12日(日) 11時より会場にて
〈記念出版〉 『山田寒山集』（限定出版 二千円）

事務局・連絡先

〒959-1926 新潟県阿賀野市出湯八〇九
川上貞雄（☎0250-62-3165）

- 「飛錫遍」二行書
 - 「曠劫飄流」山水
 - 「偶得閑中閑」二行書
 - 「翻身要」山水
 - 「弘雲兼掃月」二行書
 - 「巍然独露」山水
 - 「猗々描入画」二行書
 - 「重三疊々」山水
 - 「山僧漫作画」二行書
 - 「春畝贈烏金」墨竹
 - 為諷訪秋山 墨竹
 - 「月落烏啼霜滿天」墨竹 明治四十四年作
 - 「有鳥五色文」墨竹
 - 「寒山寒水」寒山図 大正四年作
 - 「胸中唯有竹」墨竹
 - 「萬歲」二字 大正四年十一月
 - 良寛偈 墨竹 大正六年
 - 「君心似秋月」寒山図
 - 「昨夜楓橋夢」墨竹
 - 「古渡無人船自横」山水
 - 「寒山自寒山」墨竹
 - 二段貼墨竹 明治四十二年
 - 「偶得閑中閑」墨竹 大正四年
 - 寒山 景甫 東洋 莒城 四者合作 大正五年
 - 越人宛封書 葉書一括
 - 「印章備正」
 - 「羅漢印譜」
 - 小品詩箋二種
 - 短冊三種
 - 「勤儉」扁額
-
- 刻印數種
 - 乙川大愚作
 - 茶器色紙
 - 篆刻般若心經(復刻版)
 - 扇子達磨図
 - 今川魚心子作
 - 「為誰起清風」墨竹
 - 寒山拾得図
 - 画帖「山河大地」
 - 磯野靈山作
 - 寒山拾得図
 - 會津八一作
 - 韋応物詩 二行書
 - 「一樹春風」短冊
 - 龜倉蒲舟刀板
 - 木村竹香宛 葉書四枚
 - 桑山太市宛 書狀
 - 山田正平作
 - 自画像
 - 木彫拓本 二種
 - 竹製筆筒
 - 書狀
 - 「正氣印譜」
 - 「陶磁印譜」

相馬御風作

○良寛詩軸

○水原に应じた歌書軸

星見天海作

○「南無大悲」一行

青山碧山作

○午睡図 大正十一年

以上の作品諸資料を、一〇四畳の和室において展覽。ハコ物の無味乾燥な壁面に掛けるのが定着してしまつた現今一般に行われている展覽会の在り方について、日頃筆者は懐疑的に思う面が大きい。書が日常生活に入り込み一般に馴染むようにするためにはどのような実践が必要かという点につき、模索する中での和室使用であり、この度のように丁度適した空間を笹神地区において確保叶つたことは大変有難いことであつた。図で会場の様子を伝えたい。

ところで、本稿の連載で明らかにしているように新潟県内の広域にわたり寒山は地縁を有するのだが、如何なる理由で展覽の舞台を笹神地区に決したものか、その動機についても言及しておく。

まず記念出版物巻頭に載せた「ごあいさつ」で、「山田寒山（尾張長久手生・一八五六―一九一八）は、東京を拠点に明治大正と活躍した文人。篆刻・書画・楽焼等をよくし、伊藤博文のうしろ盾を得て支那寒山寺の再興に努めた。幅広い足跡は、日本各地に残され、とくに新潟県には明治三十六年に初遊後、大正七年に没するまで教次にわたり来越を果たす。自筆詩碑が五頭山麓の村杉温泉に建つことにちなみ、今般企画展を開催し、ここに図録を上梓する次第である。慌しい日常にひと時でも蓋をして、得意とした墨竹図に清新な涼味を御清鑑賜れば、実行委員一同これに過ぎるよろこびはない。」と述べた。

そして編集後記に、



図三 会場風景

①「楓橋夜泊詩」の建つ中国蘇州寒山寺復興助成者②篆刻と墨竹画の名手、以上が山田寒山についての一般的な素描。もっと知っている人は、③陶芸も行い、落雁に焼印をおした印菓を売り出す起業家たる側面もあった。加えて、④越後にたくさん作品が残る⑤篆刻の代表作は新瀉人のために刻した「羅漢印譜」⑥初期の良寛顕彰に関与⑦會津八一の書簡や日記に登場し、その自用印を刻した⑧村杉温泉に世に珍しい自筆詩碑が建つこと——この五点をもって寒山と越後とは墨縁で結ばれていたことが認められる。

或る時、笹神村郷土資料館で石黒得一氏の「山田寒山詩碑雑感」(『五頭郷土文化』32号所収)を読み、初めて環翠楼の書碑を知り、直ちに手拓に伺い、石黒氏に御会いして以来、何人かの趣味通の方々をご紹介いただいた。この度暖めてきた企画展を準備するにつけ、今は亡き石黒氏、そして有縁賜った多くの皆様、作品所蔵者の方々にお礼を申し上げる次第である。それにしても私のような、殆ど身寄りのないものの後見人の如くなってくださったのが、川上貞雄氏。水原・安田・京ヶ瀬・笹神四地区を自ら走り回って二十人からの実行委員会を組織、事務局を担当頂いた。その陣頭指揮に、特段の謝意を表したい。また、実行委員会をお引受くださった皆様にも多大なる御力添えをくださり、何度お礼を述べても足りない位である。

この件での川上氏への初打診は、丁度田に水がはられ蛙の大合唱が始まった頃。発起人・実行委員会は酷暑の間に。そしてこの後記を今、立秋を過ぎてしたためているが、あとは無事開会にいたり記念祝賀会で旨い麦酒を初秋の一夕に、お世話になった関係者の方々と味わうことが待ち遠しい。

幸い、阿賀野市誕生記念事業の一環として位置付けられ、市長・教育長様をはじめ、市当局から格別のご配慮を賜った。一般に地味と思われる近世書画に対し、地域に煙滅しつつある文化財への照射の気運が少しでも高まりをみせるようになれば、これ以上のよろこびはない、と記しつつ最後に重ねて、関係各位に御礼を申し上げ擱筆する。

以上、一部略した部分もあるが、重要な点はこの地に全国的に例をみな

い寒山自筆の書碑が建立され、現存することなのである。碑文の紹介は前篇に既述したへ註⑤。

しかし前篇では判らなかつた寒山自筆の制作年代につきこの度知り得たので、再度書碑に言及する。

本碑は村杉温泉・環翠楼庭園の池畔に建ち、原本も同様に伝世する。寒山揮毫についての口碑伝承はない。ところが今般展覽会の折講演会の当日、参加者地元笹神在任の度會好古氏より一冊『度會照臣遺稿集 笹岡―歴史抄録』(平成14年刊)を賜った。氏の御尊父(平成元年没)により、同家に伝わる文書資料を駆使し土地の多面的な歴史を書き留められた貴重な内容で、就中武石貞松と他家との交りを紹介する条で先の寒山書碑成立の、極めて重要な事実が併記されているのだった。

武石貞松(一八六八―一九三一)は、南蒲原郡中之島村大字長呂の庄家に生まれた漢詩人。長岡の誠意塾に学び、師の高橋竹介の信任厚く、のち地元に戻り自邸にて漢詩塾・修斉館を開き地域の教育に尽力した。文人像以外にも地域振興に努め、農業整備・架橋・信用組合創立等社会貢献度が高く徳望視された。『南蒲原郡先賢伝』(大正12年刊)は名著として読まれる。

当時の越人には詩歌集を自刊する気風が強く、その多くに貞松の序跋を見出すことから、その人物の位置付けが推知されよう。この貞松につき度會氏『遺稿』より引用させて頂く。

武石貞松は村杉温泉をこよなく愛された一人である。仙境の老杉鬱蒼として天を支え、泉石磊磊として苔滑らかな壺中の別天地に魅了され、たしか大正の始め頃から屢々風騒の客となつて、村杉温泉に杖を曳かれたのであつた。そういう折りのある日(大正六年)、偶々同温泉に漂泊滞在中の墨竹画の大家、山田寒山翁(日本寒山寺建立化縁墨竹十萬講募集行脚中)と知りあい、忽ち意気投合、雅筵を開いて花に座し、羽觴を飛ばして、高談うたた清しという文人墨客の、爽やかな交遊を展開されたものである。

最後に村杉における貞松の漢誌を紹介しておく。

大正六年

丁巳七月游村杉澡浴延生泉館
與寒山翁同賦

猗々軒主人潛

翠嵐涼滿地 此処可延年

鬱々樹皆老 悠々人欲仙

開庭環蘇石 通笕引靈泉

澡浴自忘夏 壺中別有天

游村杉與寒山老師同宿

猗々軒主人潛

泉館逍遙秉燭游 又從寒老話風流

山中曆日不曾問 夜々絃歌声亦幽

村杉澡浴雜詩之一

猗々軒主人潛

誰向山中仙境開 天然林樹不須栽

靈泉澡浴堪驅病 湧自藥王祠畔來

往年囑先師鹿門先生撰遠藤翁(注七郎)開

村杉温泉碑文浴客群集碑末刻記感

猗々軒主人

藤翁辛苦昔曾聞 泉湧林亭銷白雲

十丈豊碑空委地 一篇未刻旧師文

村杉温泉為荒木氏 寒山 山田 潤

泉延寿 涼洗襟 石磊々 林森々

つまり、大正六年七月に寒山が環翠楼の前身、延生館に清遊しそこに貞松が同席。詩をよみ合い、その最後の詩に、建碑された詩文が含まれているのである。これによって、本書本碑が笹神と地縁があるものと確かめられた。

さらに『越佐の墨芳』(S54 新潟日報事業社刊)中P132にある貞松遺墨に、寒山と貞松との墨縁を看取する書幅があり、笹神での雅筵を裏付ける一事とみたい。つつが虫病の撲滅に貞松は努めたのだが、本詩では同病

で没した者を父に持つ知人を励ます一文で、文末に「寒山に篆を囑し、刻成りて寄せ到り、始めて此の印を用う。」とあるのが甚だ興味深い。ちなみにその詩文には

經過露苦又霜辛 露苦を経過して又霜辛

庸李凡桃自異倫 庸李 凡桃 自ら 倫を異にす。

鐵石心腸此花在 鐵石の 心腸 此の花在り

暗香冒雪早先春 暗香 雲を冒し 早く春に先んず。

矗立扶疎叢似雲 矗立 扶疎 叢りて雲に似

風前雪後綠紛々 風前 雪後 緑 紛々。

窓前栽去平安竹 窓前 栽え去る 平安の竹

日夕虚心對此君 日夕 虚心 此の君に對す。

とあり、長文の為書が続き、「中島君慎治来り諗げて曰く、戊申十二月十二日は先人瀬平の亡日たり。先人恙蟲の毒に罹る。余二十九齡、先人の没せし時に同じ。余の家果葉蚤世にして惴々として危惧す。自今以往俟嵩して天寿を全うす。齡先人を駕して躋るは啻に余の喜のみならず、抑亦一家の慶なり。因りて梅竹二絶を賦して以て励ます。此の時向山海軍中將、三笠艦材の製印を贈らる。寒山に篆を囑し、刻成りて寄せ到り、始めて此の印を用う。貞松陳人武石潜併せて書す。」と付す。

寒山作品の分析

展覧会中の講演会において、一 人ととなり 二 越後との接点——良寛・八一・阿賀野市を柱に話を行った。最後に、当日の内容の要旨を改めてまとめ直し、寒山書画作の分析を通して本論の結部としたい。

〈越後人の評判〉

昭和九年に没した新潟市文苑の生き字引・富山天池は、寒山と同じく篆刻家だったこともあり、寒山のことを知っていた。この天池の「寒山和尚墨竹」箱書裏面に、「山田寒山陟日清役途以伊藤公援助遊支那入姑蘇城外寒山寺為副住職慨名鐘紛失帰朝得公銘新铸一鐘而寄贈之蓋畸人也 辱交

天池居士識」と記し、伊藤博文のうしろ盾で中国蘇州寒山寺副住職に一時なつて、梵鐘を寄付。「畸人」の語でしめくくっている。この寒山の事績は今日よく知られるところだが、大正までには既に、こういった話題が彼の身にまつわり付いていたことが判る。

「そうこうして居るうちに寒山寺へも行き始めそれからやがて和尚は約一年位病臥の身となられ、亡くなられるのであるが、それは大正七年十二月廿六日大雪の朝であつた。亡くなられる数日前、病篤しと四五日前から泊り込んで居たが、一日私を枕頭に呼び手を借せと云はるるまま右手を差し出すと、その手を握りながら御自分の胸元まで持って行かれ、しばらく押しあててからかへされ、そのまま瞑目して居られた。その翌々日はついに永別となつたのである。和尚は平生、人は生きて居る時の行事がすべて遺偈であると云つて居られたが、誰も遺言らしいものは聞かなかつた。影ひとつ残さない、華麗淡泊の生涯であつて、禅門のある人が『イ、和尚だつた』と云ふたが、私も全く同じ感想で尊く思っている。」

先行文献（『書品』79号）によつて紹介するが、書き手は山田正平。新潟市生。本姓木村。寒山教次の来越中、見込まれ寒山の養子になつた、昭和を代表する印人である。

〈越後への来遊〉

初遊は明治三十六年。正平の記述によると、彼十六歳の夏、上野寒山寺に奇寓。その頃には先述の蘇州寒山寺新鑄鐘を中国へ贈り、続いて千葉方面へ日本寒山寺建立を発願、墨竹を描き全国募縁を企及。正平が上京して四、五ヶ月目には越後高田方面から柏崎佐渡へと出張。「それがついに二年となり三年にも及んだのであつたが」（『書品』前号39頁）とある位、本県への長期滞在を果たしたようである。正平十六歳は大正三年（一九一四）、するとこの年から、大正五年くらいまでのことと推及される。因に『山田寒山・正平展』（平成四年 古河市篆刻美術館）所収「山田寒山年譜」によると、大正四年の条に「日本寒山寺建立結縁墨竹十万講募縁のため、新潟各地へ巡遊する。」とあり、これと符合する。現存資料「羅漢印

譜」側款に、「癸卯秋日舟江客中應需篆十六羅漢尊者之陶印 為竹香居士人雅鑒 姑蘇寒山山田潤」と刻む。「癸卯」は明治三十六年。以上を総合して、この年が初来越とみて誤りない。

〈遺墨の鑑賞〉

全国に名を留める作家になるには、多作の条件がある。寒山は名目上に「墨竹十万講」とうたつて居る如く、とにかく多作で、しかも題材は皆近似的で、その殆どが「風竹」「竹石」自画讚と相場が決まつている。席書で一気呵成に大量生産したものと思われるが、注文主によつては改まつた揮毫もあつたであろう。紙本の縦作品（タテ130×ヨコ30）が多い。

〈箱書について〉

共箱作は非常に少ない。図四作は珍しく自筆箱書のある共箱で、表に「寒山山潤墨竹」、裏面に「余北越客中留錫於三條極樂寺一年有半因清風玉木君之清宿縁不淺也 一日玉木君携来南画集指示立原杏所先生墨竹需於余臨之 漫潤筆作此図而形不存神不存筆不到意不到及遠矣 慙 丁巳初夏八幡宮祭典之日 支那寒山寺沙門寒山山田潤」と、いっどこで誰のため何の目的で揮毫したものか、制作背景が長文の行書で綴られているのは誠に珍とすべきである。前項とも重なるが、「丁巳」は大正六年、一年半もの



図四 三条での墨竹共箱作

間北越客中であつたとここに読める。やはり大正四年頃には越後に滞杖中だつたが。本作は三条市内で制作したもので、極楽寺、八幡宮といった同地の名刹が登場。

〈墨竹の内容〉

本作が変わっているのはただの墨竹図ではなく、江戸期の文人・立原杏所（一七八五〜一八四〇）の墨竹を真似して描いたものであること。もとより寒山流の感情移入に勝った風であろうが、「しかるに形、存ぜず。神、存ぜず。筆、到らず。意、到らずして遠く及ばざるなり。」と告白しているのは寒山らしからぬイメージで、本作の注文者・玉木氏に余程敬意を払つてのことかもしれない。

〈書・画讃〉

同じ詩を讀文に用いる例が多い。蘇州寒山寺にあつて日本の觀光客にも知名度が高く、通俗的に過ぎるきらいもある張継詩「月落烏啼霜滿天 江楓漁火對愁眠 姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲至客船」の揮毫例をよく見るのは、その事績上当然であらう。

注目すべきは、寒山従来の詩ではなく、ここに良寛詩がみえる点なのである。

宅辺、苦竹有り。冷々、数千竿。笋は送り全く道を遮り。梢高、斜めに天を払う。経霜、精神を培い。煙を隔て、うたた幽間。宜しく松柏の例にあるべし。何ぞ桃李の妍に比せん。竿は直にして、節はいよいよ高く。心虚にして、根はいよいよ堅し。汝の貞清の質を愛し。千秋希わくば遷ること莫れ。

〈寒山と良寛〉

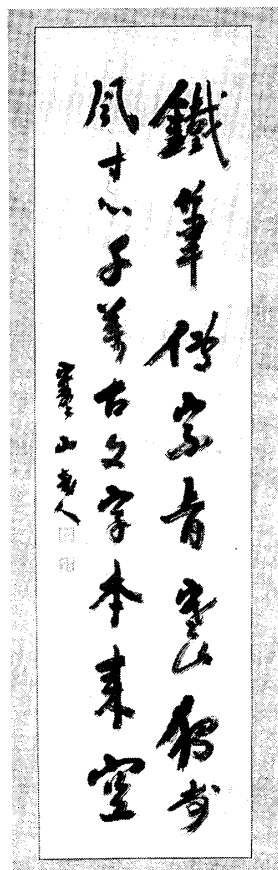
寒山と亀田鵬齋合作幅・良寛一行「南無天満大自在天神」・良寛双幅「君看雙眼色 不語似無憂」幅は、世に知られる良寛の一級品だが、この箱書に寒山の筆が入っていることは注目すべきで、相馬御風や安田鞆彦・原田勘平・森哲四郎等が箱書をする以前、一番最初に筆を執っているのが

即ち、この寒山なのであつた。今出雲崎町良寛記念館にある良寛遺愛の如意や糸魚川市相馬御風記念館蔵の良寛島崎庵居図幅も、かつての寒山所蔵品。良寛堂建立の提唱、分水町牧ヶ花の解良家所蔵「心月輪」鍋蓋をみての揮毫幅等、良寛遺跡周辺に足跡を点々と残しているものであつた。良寛の偈を讀文に施す背景には、前記のような良寛顕彰史の極初期に関与した寒山の姿が彷彿とされるのである。類推すると、本作の依頼主・「玉木氏」とは、大正七年に『良寛全集』を編集した玉木礼吉ではなからうか。

〈寒山の書幅〉

図五作程の大字作も稀で、「鉄筆、宗旨を伝う。寒山、独歩の風あり。寸心、千万古。文字は本来、空なり」(寒山の篆刻は古より正統な趣を伝えており、作品には他と異なる独特の風格がある。その心には、千・万年の昔からの作風をそのまま伝えていく。文字というものは本来、規矩があつてないものなのだ。)と記す。『羅漢印譜』にも、同文の寒山書が載っている。この寒山を讀える文は、越後平井(現柏崎市)生の曹洞宗高僧・星見天海の作で、天海は、寒山代表作「羅漢印譜」の羅漢像開眼式を任された問柄。誇らしげにこの文をワラ筆の如きもので一気呵成に書く態度こそ、寒山らしいと思われる。

なお一般的に、寒山の書は鋒先をもって揮毫したような柳条状の細線による、縦長の小字が殆どである。



図五 寒山書幅

〈阿賀野市との接点〉

大正期には、ラジウム含有量の高さでつとに知られていた村杉温泉。今に盛業を重ねる環翠楼庭内に、全国でも珍しい、寒山自筆詩碑が建つ。「泉延寿涼洗襟石磊磊林森々」（泉は寿を延べ、涼は襟を洗う。石、磊々。林、森々。）と、かつて延生館と称していた当館の名にちなんで、その庭園の泉石と杉木立の森閑とした佳景を称讃して作詩したもの。先々代・荒木六蔵氏が建碑したもので、この肉筆もまた環翠楼に伝わっている。署名は「寒山」下に「田潤之印」（朱文印）を捺す。先述した如く寒山の来越は大正四年頃から頻繁で、村杉温泉の効能が一般に喧伝され始める頃と符合し、この一作は大正六年七月、当地で書いたものである。

また、水原の旧家で漢詩をよくした漢方医・三浦桐陰の訃報を知った寒山が、焼香に訪れたとの記述が、『父祖の面影』にみえる。大正四年七月二十三日、六十八歳で桐陰は没した。同じく水原の印判業・吉田可月堂には、「楓橋夜泊詩」文を、分けて刻印にした当時の店主の作品が伝世し、おそらくはこれも交わりのあった一証であろう。

〈生来多芸多能の人となり〉

十七・八歳の頃、長崎の印人・小曾根乾堂を訪れ、次いで福井端陰に影響をうけ、さらに渡清して彼地の大家・呉昌碩に会う。こうして篆刻家として一家を樹立。墨竹の妙は数多く、全国に行きわたる。その詩・書また格別に自由人の味あり。楽焼でも自己を売出す。蘇州寒山寺への新鐘寄付なる一大企画者。資金を捻出するため書画刻印頒布の周旋についても、風狂人・あるいは企（起）業人・野心家たる人柄が投影された珍しい潤記や作品申込書が残る。その発起人（支援者）には数名、越後人が名を連ねる。作品集の裏表紙には、新潟市の會津八一自用印に含まれる寒山刻七顆を掲出。唯一、篆刻の弟子とよいて津川生の乙川大愚の存在等、やはり越後路は寒山顕彰の舞台として相応しい。

〈上記の補足説明〉

人となり、越後との接点を語る上で、寒山と前後する主な越後文人の生没を並べてみる。

良寛（一七五八～一八三一・七十三歳）

會津八一（一八八一～一九五六・七十五歳）

山田寒山（一八五六～一九一八・六十三歳）

木村竹香（一八六七～一九四三・七十七歳）

山田正平（一八九九～一九六二・六十三歳）

乙川大愚（一八九八～一九五六・五十八歳）

今川魚心子（一九〇五～一九八四・七十九歳）

青山碧山

星見天海（一八三三～一九一三・八十一歳）

磯野靈山（一八七八～一九三二・五十四歳）

右の人物群をふり返ってみると、まず良寛が没して丁度半世紀後に八一が生まれている。『會津八一全集』（中央公論社刊）を繙くと、壮年期の八一がしばしば寒山に刻印依頼を行っていることが書簡より読み取れる。寒山の方が八一より二十五歳年長である。にもかかわらず、またよく寒山を評し、「寒山は老勁一気呵成に数顆立地に作り天真の趣あれど、従て変化は乏しく候。」といい（式場益平宛書簡・大正二年九月十四日付）、また「會八朔」（白文印）刻に対して、「姓名印は篆法の怪奇に流るるを嫌ふ」と記す。前言を総じて考えると、早い運刀は単調さを生みかねないが、姓名印については小手先の細工変化のない方がアキがこなく、格が高く映るといいたいのであろう（註⑥）。

木村竹香と寒山とはほぼ同世代。竹香の次子・正平を寒山は養子とした。寒山印技の直流の系譜はしたがって、この正平に受け継がれた図式となる。一方、全国でも殆ど類例をみない印技の弟子に越人が一人いて、津川町正法寺住職・乙川大愚である。代表作「篆刻般若心経」を残し、正平より寒山調をよく踏襲した刻風を看取する。津川の風光明媚もあって正法寺は独特の文化サロンを一時構成し、東京杉並より画家・磯野靈山そして棟方志功等が姿を現した。両者の自用印を大愚は制作している。さらに大愚の法

弟に今川魚心子があって、寒山と直接的な縁はなかったが正平を知っており、後年「〃印人」正平・大愚〃画人〃霊山の思い出」(『いしづみ』・新潟拓本研究会刊)を執筆し、貴重な往時の文人交流史を後世に伝える役目を果たした。青山碧山は漆工、星見天海は曹洞宗禅僧。共に「羅漢印譜」完成途次に関与した。以上が寒山を中心とする越後文壇で、篆刻はけっして小事の文化活動ではなく、詩書画周辺の文雅と密接に関わり合っていたのである。

〈補足説明 その二〉

良寛顕彰史上、書道界の人物でまず初期に登場するのが寒山である。先の展覧会出品作中、良寛史蹟に寒山作が伝世する興味深い数例があった。

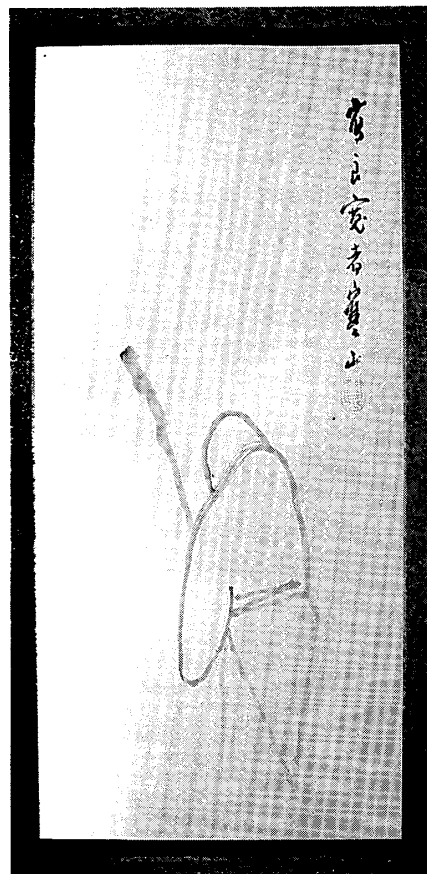
まず三島郡出雲崎町尼瀬の光照寺。ここは良寛剃髪の地として一般に知られる古刹だが、ここに巨大な扁額(131×66センチメートル)「水墨竹石自画讃」が掲げられている。「碧澗泉水清 寒山月華白 黙知神自明 觀空境逾寂 寒山田潤」と讃を記す。

良寛が長年住み慣れた西蒲原部分水町国上の五合庵。同地周辺に良寛の外護者となった庄屋素封家が点在するがその一つ、分水町源八新田の森山家には、かの有名な良寛遺愛の鉢の子が保管されている。そして同家には「水墨良寛像」が伝わる。杖をひく後ろ姿を淡雅に表現した頗る韻致漂う作で、右上方に「寫良寛者寒山」(良寛と写すものは寒山なり)と讃を付す。かつて当主は新潟の印人・富山天池と親しく、よって寒山と邂逅があったとしても充分考えられる。

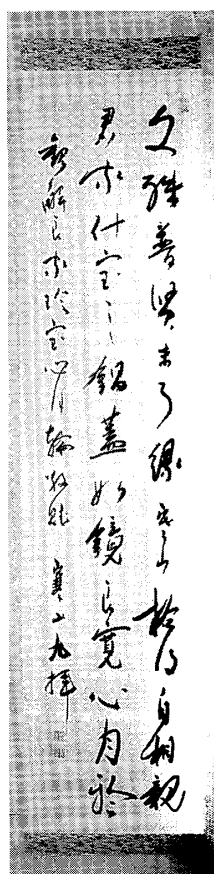
同じ分水町の牧ヶ花の旧家・解良家には「心月輪」鍋蓋刻字が蔵される。この著名な鍋蓋を大正期、実は寒山もまた親しく鑑賞していたのである。同家に伝わる寒山書軸に、「文殊普賢未了縁 寒山拾得自相親 君家什宝之鍋蓋 如鏡良寛心月輪」と記され続いて、「視解良家珍宝心月輪敬賦 寒山九拜」とあることがその証である。「珍宝」といい「九拜」と署名を施した寒山作より、良寛と如何に対峙したものが態度が窺える資料として注視したい。

もう一つ、良寛生家跡の一部に建つ出雲崎町の良寛堂は、大正十一年九

図六 良寛像



図七 視解良家珍宝



月十六日に建立され、平成十四年に八十周年記念行事が地元で盛大に挙行された。この生地における良寛顕彰の象徴ともいえるモニュメントは、地元の篤志家・佐藤吉太郎(号・耐雪 一八七六〜一九六〇)の発願によって成ったものだが、この建設運動は遡って大正四年「大愚山良寛寺造営趣意書」草案起稿が原点としてある。そしてこの趣意書作成時、耐雪が相談をしたのが権田雷斧大僧正で、真言宗豊山派管長・西越村(現出雲崎町)出身。もう一人が山田寒山なのだった。耐雪の良寛堂建立までの経緯は、「用留」と題する筆写録に詳細に書き綴られており、町教育委員会が現在保管している。所有者佐藤家の身内で耐雪の孫に当たる反町タカ子氏が近

年、『良寛』（全国良寛会刊）四十二号より内容の紹介と分析とに努められている。その記事に従えば、

大正四年（一九一五）八月廿一日

山田寒山氏来訪に付 松涛山にて中食を餐応し 良寛上人書 詩一幅を寄贈す

大正六年（一九一七）八月一日

山田寒山師来訪せらる 明日良寛研究会開会を約す

同年十月一日

東三条の山田寒山師より良寛の師匠有願禪師の筆雲龍老軸寄贈せられしにより礼状遣す

との記述がある。大正四年寒山は出雲崎を訪れ、書画頒布会と大講演会を開きそこで、生地に良寛顕彰の石碑一つもないのはよろしくない旨を訴え、この一大警句がのちの良寛堂完成に結びつく第一歩となったという。松涛山とは耐雪の別荘のことで、建築物三角堂は現在尼瀬・くるまや旅館の所有となっている。三角堂の天井絵には様々な来遊文人の即興書画がはめ込まれ、中に寒山の墨技を見上げることが出来た。なおこの時耐雪が寒山に贈った良寛書とは、反町氏のペンによると「地震後之詩」（現敦井美術館蔵）だとされる。

また大正六年十月、本県三条周辺に寒山が滞在していたことが判る。先掲墨竹自画讚共箱作（図四）の箱書に、大正六年初夏三条市内極楽寺に滞留すること、一年半余りにわたる旨を付記する。「八幡宮祭典之日」と具体的に箱書を施した月日を記していることよって、初夏の三条の風物詩となっている五月十五日、御輿渡御の頃と推定出来る。耐雪宛の書簡は、十月一日付東三条からのもので、箱書通り同所近くに長期滞在を続けていたとみたい。また新潟市内在住・井上慶隆氏より恵まれた「新潟新聞所載良寛関係記事目録稿」を検索すると、大正六年（一九一七）一月八日紙面に、三条町極楽寺に滞在中の寒山和尚が、一月五日に良寛遺墨遺什展を開催した記事が載っていることを教えられた。三条を根城として良寛顕彰に関与する動行が、徐々に浮かび上がってくる感がある。

のち大正六年天長佳辰の日、良寛寺造営企願人として耐雪自身、永瀧文

作町長以下、町外新津恒吉を含む計十二人、また顧問として豊山大学長・権田雷斧 曹洞宗師家・新井石禅 東洋大学長・大内青巒 寒山寺主・山田寒山の四名が決定する。翌七年には耐雪が雷斧と寒山とを訪問し、寺造営のための費用捻出のため諸名家に書画作寄贈を依頼する件につき協議、実際東京・京都を訪れた皆さんの喜捨を確約された。今、良寛記念館に当時耐雪が持ち回った折帖が保存され、各作家が少しずつ寄書一筆をしたためた多彩な内容になっている。富岡鉄齋・棟方志功を含む。就中、寒山墨竹図も入っており、「日為行乞業夜読寒山詩 明月當窓照清風 繞屋吹胸中吾笑我門外真人 知墨竹幾千萬揮毫二六時」そして「右半切甘葉寄附山田寒山」とある。つまり造営資金に充てるべく、寒山は半切自作二十枚を寄附していることが本資料より窺える。制作年代は未記入であるものの、大正七年中になったことは間違いない。以降の年に寒山の名が出てこなくなるのは、七年十二月二十六日、東京下谷において寒山が病没したためである。

大正四年八月二十一日 出雲崎

大正五年一月越年 加茂

大正五年八月 良寛書「南無天満大自在天神」箱書

大正六年一月五日 三条極楽寺に良寛遺墨遺什展を開催

大正六年五月十五日 三条極楽寺滞在

大正六年八月一・二日 出雲崎円明院において良寛研究会

大正六年十月一日 東三条滞在

良寛関係資料より、寒山越後滞在時期を幾つか右に抜粋してみたが、今後制作年と揮毫場所が判明する書画作を蒐集することによって、さらに越後路での足跡の照射を試みたい。

おわりに

印技・書画また楽焼、日中寒山寺復興建立事業等多彩な活動に生涯を閉じた寒山だが、その人となり、受け皿となった各地で他者を魁きつける

ものがあつたのであろう。東蒲原郡津川町に重要な後援者が存在したことなど、本論に言及がもれたことや調査途次のことや幾つかあり、後考を起稿するつもりだが、最後に寒山の特技とした自画讃幅より讃文を録し、自由当世風流韻事を生き抜いた人物を偲びたい。

○鉄筆、宗旨を伝う。寒山、独歩の風。寸心、千万古。文字、本来は空なり。

○春畝、烏金を贈り。寒山、緑竹を描く。道、貧なれども俗塵なく。銭、尽けども天福多し。

○飛錫、東西にあまねし。雲に棲みまた露に宿る。狐介、老寒山。前身あるいはこれ竹なり。

○たまたま閑中、閑を得。漫心、画外の画。大痴は至愚をかねる。竹の如くしてまた石の如し。

○猗々、描きて画に入り。紙上、緑雲うずたかし。清風明月の夕。故人を彷彿とし寒山来たる。

○山僧、漫りに画を作る。無法、すなわち天真。
○巍然たり独り白雲の間に露れ。雪氣、誰が人が寒きを覚えん。八面みな背処に向くはなく。空に従いて突出するを、人と看ん。

○一、二、三竿の竹。虚心にして碧空に聳えたり。山僧の遊戯の筆。画師の風を学ばず。

○胸中、ただ竹あり。眼界、自ら塵なし。随う処、寒山路。清風、日々新なり。

○昨夜、楓橋の夢。寒山古寺の鐘。暁天の霜、雪に似たり。残月、高峰に落つ。

山田寒山略年譜

安政三(一八五六)七月、父山田丈助と母貞参尼の子として生まれる。
本名・潤子。齋号は芝仙堂・風火仙窟。

慶応二(一八六六)十二歳 熱田・円通寺にて得度。曹洞宗永平寺派。

明治十九(一八八六)三十一歳 三重県最明寺を辞し、大阪寒山寺へ。この頃までに長崎の印人・小曾根乾堂、伊勢の印人・福井端隠に篆刻を学ぶ。

明治二十八(一八九五)四十歳 東京三田芝公園内に移住、芝仙堂と号す。

明治二十九(一八九六)伊藤博文主催「滄浪閣落成詩会」に参加、知遇を得る。

明治三十年(一八九七)中国に渡り蘇州寒山寺住職に四ヶ月程就く。
明治三十二(一八九九)麴町に「陶友会」を開く。養子・木村正平、新瀧に生まれる。

明治三十四(一九〇一)この頃向島へ。

明治三十六(一九〇三)四十八歳 新瀧へ百日程滞在。新瀧の印人・木村竹香の求めにより羅漢鈕陶印十九顆を一気に刻す。

明治四十(一九〇七)五十二歳 岡本椿所・五世浜村蔵六・河井荃廬・初世中村蘭台等と丁未印社を創立。

明治四十一(一九〇八)四月、木村竹香が『羅漢印譜』(一帙二冊)を刊行。

明治四十三(一九一〇)五十五歳 夏に寒山寺新鐘完成。秋、甲乙丙三種の新鐘分身頒布を企及。

大正二(一九一三)五十八歳 分水町地藏堂の富益齋著『印章備正』を校訂刊行。

大正三(一九一四)六月、神戸港から新鐘を蘇州寒山寺へ送る。木村正平、上京。

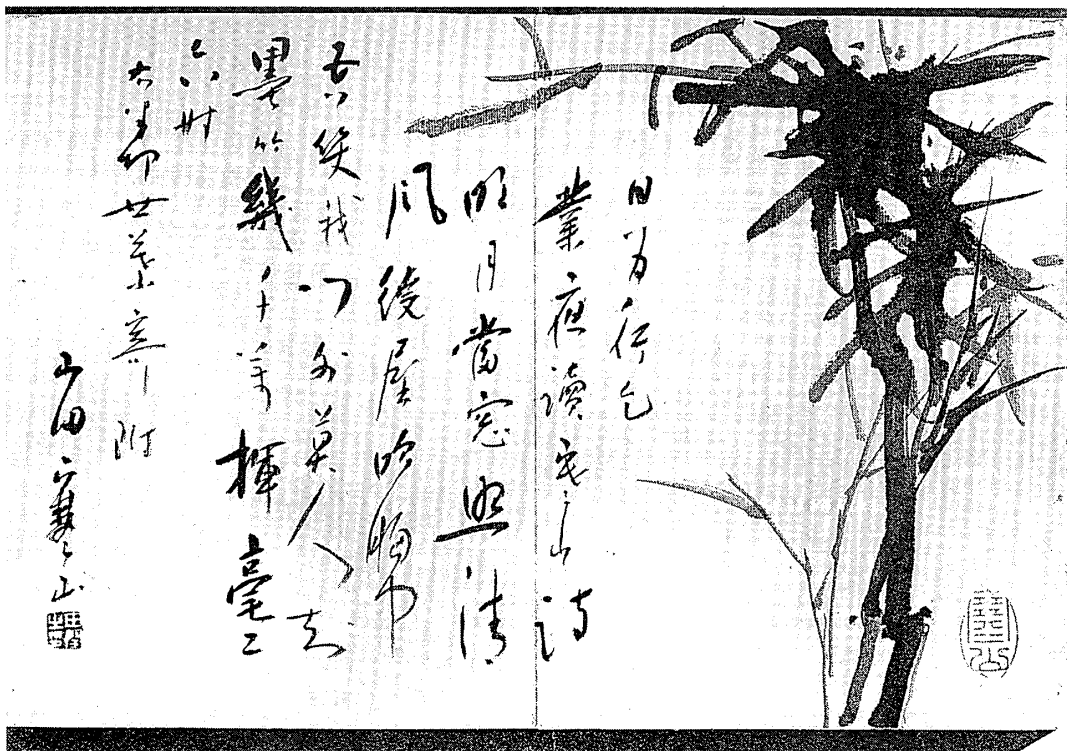
大正四(一九一五)六十歳 翌年にいたるまで「日本寒山寺建立結縁墨竹十万講募縁」のため、越後へ。

大正七(一九一八)六十三歳 下谷区下谷町で没す。木村正平、寒山の長女・喜美子と結婚し山田家を嗣ぐ。

大正十三(一九二四)寒山七回忌のため『羅漢印譜』を再刊。

註

- ① 『新潟大学教育学部紀要』（人文・社会科学編 平成八年三月）から『新潟大学教育人間科学部紀要』（同編 平成十年九月）までの六篇。
- ② 中江杜澂（一七四八～一九一八）。『五適先生杜澂伝』（佐藤耐雪編著 昭和十二年出雲崎町教育会発行）及び『出雲崎町と釧雲泉を中心とする文人』（平成十六年 釧雲泉実行委員会刊）参照。出雲崎没。
- ③ 松沢佐五重氏による研究成果が『分水町郷土史』（町教育委員会刊）に収録される。
- ④ 正平の娘・梅枝氏と正平の孫・正氏の御来場があった。
- ⑤ 拙稿「越後路の篆刻家・山田寒山II」に言及。
- ⑥ 新潟市渡辺家蔵「秋艸堂印譜」（実捺本）所収印影参照。



図八 良寛記念館蔵 画帖より